



## 一貫コース通信

### 学校休校の間に読んだ本の事（1）

コロナウィルス感染拡大に対する緊急事態宣言の全面的な解除がなされた事は、誠に嬉しい限りである。この事に対し、多くの言葉は必要ないので、早々に本論に入りたい。

3月からこの間、今般の事態に対し国から自粛要請が出されて来た。具体的には生活圏の制約から、仕事上の勤務体制等…自営の方の営業すらもその対象となって来た。

これを踏まえ、本校も対応を図って来たが、詳細は既知の通りである。私は、特にコロナ関連の情報収集に注力したが、合わせて気になっていた教育関連の本を読むことを心掛けた。

その中で、心に残ったモノを採りあげたい。現在は、国際化の潮流を止める事は出来ない。思うに、今後は、これまで以上に諸外国の教育制度が論じられる様になって来るだろう。例えばアメリカのIBや、ヨーロッパのバカロレア等である。これまでも聞きかじってはいたが、正直、理解の努力をしないまま来てしまった。これに対し活路を与えてくれたのが、中島さおり著・河出書房『哲学をする子供達』（バカロレアの国フランスの事情）である。著者はパリ在住の日本人女性で、既に帰化し男・女二人のお子様をフランスの教育で育てている。内容は、現在進行形の実事報告で、平易な話言葉で綴られている。主に、カリキュラム・実際の指導内容・PTA組織・バカロレアの仕組み等々で…とても解り易い。著者は、私の教育理念は、人種・出身(移民も色々)・宗教も多種多様の状況下で、フランス国民(多民族国家の一員としての)を創る仕組みなのだという。実子の展開を通し描いているのは、哲学を学ぶのではなく、ひとり一人の子供に哲学させるのが…仏流なのだそうだ。具体的には、様々な考えに接し、自分で考える。それで得た持論を、第三者に如何に伝えるか。この過程を最も重視するのだと言う。又、日本は他人との協調性を重んじるが、私は異なる個性を如何に醸成するかに力点を置く。このプロセスそのモノが、哲学する事…と言うのだが、作家(精神科医)、加賀乙彦氏も著書に同様の事を書いていた。特に印象深い事は、塾や予備校と言う言葉が一斉出てこない事だ。日本との違いは明白で、読む価値が在ると思ひ紹介した。次は、松岡亮二著のちくま新書『教育格差』（階級・地域・学歴）である。正直、ほぼ半分の頁で読むのを止めてしまった。なぜなら、結論が見えたからである。著者の分析では、子供の教育に最も重要なのは、保護者の社会経済的地位SES (Socio economic Status) だと言う。そして、親の資産が子供の教育環境に如何に大きな影響を結果的に及ぼすかが、繰り返し記されている。日本には地域差を前提とする厳然たる教育格差が存在する。これを様々な統計的データから、論証している。論旨からは、現場(私達)の学校教育よりSESの影響が大きいとも読み取れ、目前の福島現状を鑑みると、厳しい内容に感じられる。しかし、この現実をただ無策のままに甘受したら、地方の子供達の多くは教育に希望が持てなくなるだろう。この現実の中で、今、私達は何が出来るのか。その事を考え、現状打破に向けた実践の一助としたいものだ。

